

文部大臣談（財團法人大日本育英園創設ノ開スル）

全國民待望の中に國家的育英機關として近く財團法人大日本育英園が創設される運びとなりましたことは洵に慶祝に堪へないところであります。殊に現下東亞戰爭は愈々決戦段階に突入し眞に舉國一致最後の勝利に向つて必死の救闘を要する秋、而も恰も全學徒に對する徵集延期が停止せられ難かしき學徒總進軍が令せられましたと時を同じくして、戰爭完遂の爲最も堅切なる學術講道の爲眞に優秀なる後續部隊を養成することは絕對必要であります。

本施設の目的と致しますところは、有爲なる秀才であり乍ら經濟的理由に基き進學の機會に恵まれない驕徒を育成教育して、國家の要望する人材の確保に資せんとするにあるのであります。

尚育英制度の創設に當りまして、特に感ずる點を一二申し加へたいと思ひます。

其の一は我が國に於ける育英制度は歐米に於けるものと至く其の根本精神を異にする點であります。即ち個人主義的社會主義的諸國に於ける育英制度とは多少變を異にし我が國に於ては家族制度の本義に則つて親は子を其の才能に従つて出来る限り教育して國家の爲に御奉公せしむる責務を負ふものであります。この親の責務に對する國家の協力の意味に於て育英制度が考へられ、從つてもとより親に對し其の責務を免除するものではないであります。我が國の育英制度は我が國傳統のものでありあります。との根本精神を明かにすることが今後育英制度運営上極めて重要なことゝ思ふのであります。

次に本制度は實に舉國一致の協力の下に生れた點であります。殊に議會は全員一致の熱望であります。政府と全く協力し之が實現に向つて絶大なる努力が拂はれました。固より決戦下國政の公報に亘り「一糸亂れざる」一億一心の協力が行はれてゐるのであります。本制度の誕生は明かに始の一端を説明するものとして極めて心強いものがあると思ふのであります。

最後に本制度創設に對し如何に全國民が熱烈なる期待をかけら

れてゐたかの點であります。本年議會中之が發表を見まするや各方面から設々と寄附金の申込があり金額の多少は別としまして其の熱情には關係當局としても餘りに堪へないものあります。何れも感激に充ちたものであります。が殊に南方出征中不幸に倒された義軍勇士より血誓にて寄附金を交付されましたこと

に對しては全く感謝を傳さざるを得ざる次第であります。

されども感激に充ちたものであります。何れも感激に充ちたものであります。が殊に南方出征中不幸に倒された義軍勇士より血誓にて寄附金を交付されましたこと

に對しては全く感謝を傳さざるを得ざる次第であります。

史料 1

科學者養成のスバルタ教育

六月中旬、米軍がサイパン島に上陸。翌日にはB29が北九州の八幡製鐵を爆撃した。初の本格的な本土空襲である。七月にはサイパン守備隊二万七千人が玉砕、さらに八月にはグアム守備隊一万八千人も玉砕の臺き目をみた。戰況はまさに慘憺たる様相を呈しつつあった。

一方、国内では、東条内閣が總辭職して小磯内閣が発足。十月十八日には兵役法改正で、

兵役年齢が十七歳まで引き下げられ、十七歳未満の兵役志願も認められる」となった。

そして十一月二十四日、七十機のB29がサイパン方面から飛来し、東京を轟撃。ついに本

格的な首都大空襲が始まったのである。

そういうのは最近、中波のラジオ放送に混じって、時折サイパン発の日本語放送が聞こえてくることがある。わが家のラジオは自作のスーパーテロドイン方式だから、これがまたよく聞こえるのだ。ともあれ、大日本帝國の崩壊をねらうアメリカは、物心両面にわたって最後の大攻勢をかけ始めたようだ。

ものはや戰況は、大和魂よりも兵器の優劣とその整備に左右されるということが、誰の目にも明らかとなつた。問題は、その明々白々な事実が見えない人が實に多いことである。

戰争における勝敗という現実は、「必勝の信託」やスローガンよりも、頭脳や判断力、及び武器の生産能力によって決定される。兵器を開発するための電気回路や電波機器の設計は、武士道や忠誠精神ではなく無理といつものだ。それらは世界人類共通の、オームの法則や複素量の計算などによって行われている。神様の力を借りて電波の波長を短くするなど到底できるはずもない。戰時研究は、ヤオヨロズの神が口を抉める世界ではないのだ。

とはいっても、細胞研究要員の速成教育機関の試験を受けた時には、さすがに神頼みをしたくなる心境になつた。合格発表の前夜には、このまま地球がなくなればいいとも思つた。

なにしろ「門」が狭すぎたのである。

受験会場となつたのは、京都帝大の本講堂だった。全国の中学生や専門学校、高等師範などから推薦された六百人の受験者は、わずか五十人。試験に合格さえすれば、学年や年齢に関係なく飛び級で入学することが許された。聞くところによると、手本はどうもチヌドイツの英才教育らしい。

そんな難関をかろうじて突破ることができたのも、親父の字彙豊で小遣いを稼ぎ、実験器具を購入してはコツコツと実験をつづいていたおかげだった。それに、ひたむきに研究に取り組む私を見守ってきた、先生方からの熱心な推奨もおそらくはあったのだ。

十一月、いよいよ京大で戰時研究員の候成栽培が始まった。この養成機関は文部省直轄の組織で、東大・京大・北大などに設置され、各大学の総長が養成機関の長を兼ねていた。

卒業後は大学か軍の研究所で、戰時研究に從事することが義務付けられる。学費は無料で、それどころか、助手と同様の給食を文部省から支給されたのは驚いた。

私が籍を置く電気工学教室では、電気工学や高専数学、高等國語などがカリキュラムの中心だった。電気以外では過渡現象や力学などの物理學も学んだ。この他に、實習では各所の研究室や研究所を回って、戰時研究の手伝いもする。レーザーや暗視鏡、ソナーなどの軍事機器を実際に触接するのである。

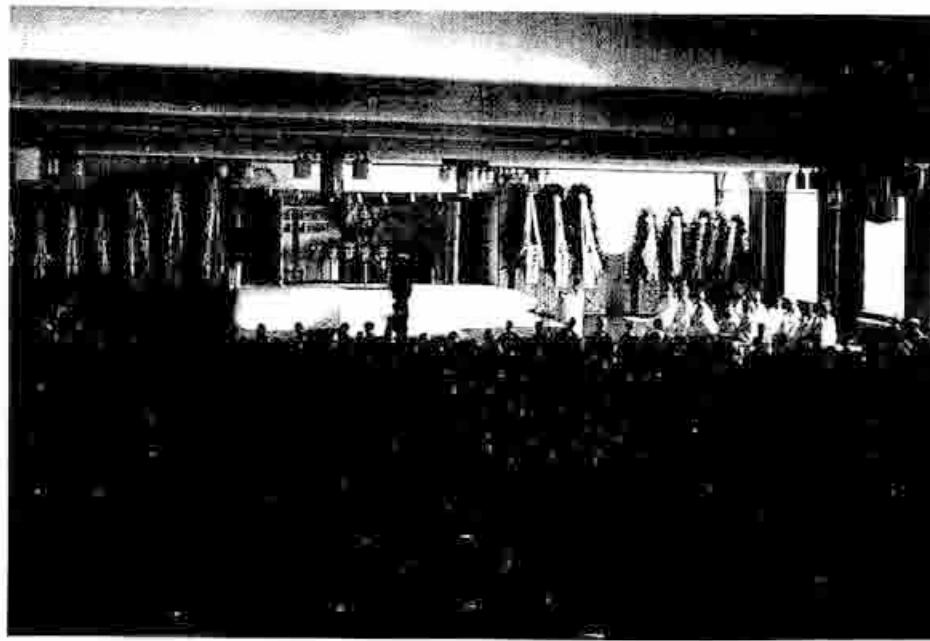
毎日、朝八時から夕五時までが学業、夕六時から七時までが實習である。短期間に多くの知識をつめ込まれるが、日々に費やされる時間数がけつて短くはない。毎日の特別は身も心も疲れさせるものだった。とにかくテンブンカンパン、万事クソ難しくてそつぱりわからないのだ。教授陣は電気工学教室の大名の先生方だが、教える相手がわれわれしかいないものだから、縋りで入れかわり立ちかわり猛烈な遠慮で講義を進行させる。全然遠慮といふものがない。

ある教授などは、ドイツ留學時代に持ち帰った原語のテキストを書写真にコピーしてそのまま学生に配っている。まずドイツ語の技術用語を習得してからでないと、何が書かれているのか見当もつかないのである。ある学生がたまりかねて、「ドイツ語の専門語はわかりません」といつたら、「そういう人間はここにいてもらわなくていい。ドイツでは子供でも読み書きをしている」と、悲しい顔をしている。

いわれてみればその通りだから、この句が織りない。まあ、文部省が会話を勉強するわけではないから、日独技術辞典を調べれば十分間にあう。しかし、睡眠時間の大縮な短縮は避けられない。就寝時間は毎日午前三時だったが、おかげで半年後に卒業する時には、帝大では四年がかりで学ぶ電気工学の課程をすべて終えていた。

事項	内 容	期日
研究会本部会中	我等は本部会中 行市二依ル御衣ニ 開スル件	西
講義会及授業会開	我次第、華式ノ方法等「時局ニ關ミ耶ラ故猶ナトシ特三四五六 事ニ於ケル復習式ハ全學生ニ一張ニ拿シ、一頁ニ付賣セシキル」 式ニ復シ、国民精神ノ高揚、時局ノ堪能意欲ヲ計ルニカム、此 事御衣等ノ書類訓説ニ於テ傳ニ之ヲ強調セリ	春
防災概要	一、	
	一、五防減災開タル科学講演	中部講習會今朝參議
	後藤重蔵大佐	
	福井 信立	
時局ニ及スル心機	十一月廿四日	昭和十一年
（未明）大正二年二月	昭和十三年一月十七	十二月六・七・八日
東邦社論稿委員	昭和廿七年一月廿四日	昭和十三年
前田 多門	昭和廿七年一月廿四日	昭和十三年
十月十三日	昭和廿七年一月廿四日	昭和十三年
	授業時數三十時間	
常学一般		

打罪二級の者を二種に於てナル特質式ハ全學生一等生三等生一員ニ採用セシム
開文スル件
式ニ復シ、国民精神ノ高揚、情熱ノ燃盛爲目的ルニカズ、總
長、華盛頓ノ書類採用於子供ニ之ヲ制御セリ
一、防災概論



四

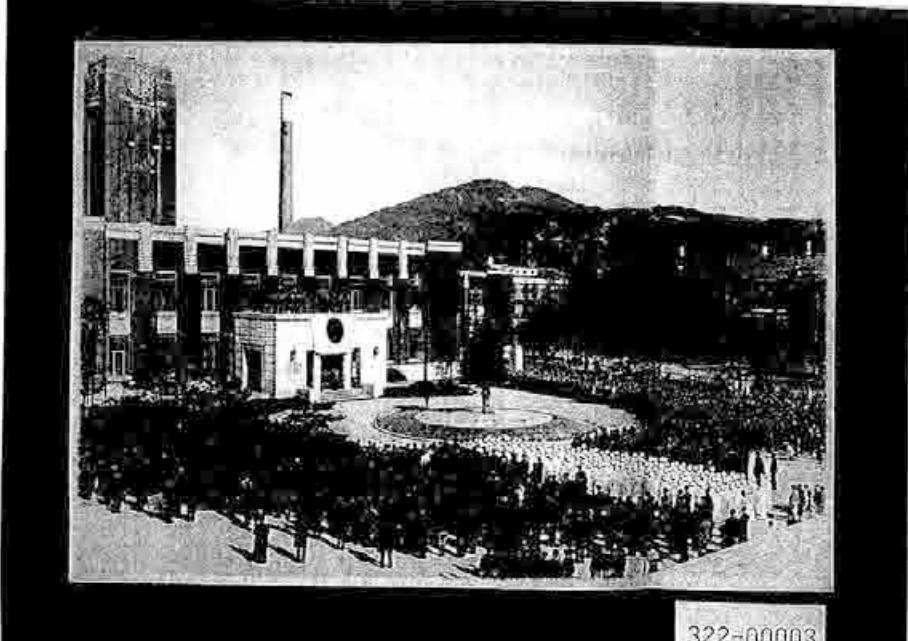


写真 1

いは、しばしば戦争責任問題として追及されたんですね。占領下では、戦争は悪いということになりました。

きようとかくは 京都学派 広くは。大正・昭和間に京都帝大文学系の教材であった西田孰多郎^{ノシタ・マサヲ}を中心、その影響を受けた哲学者たちの学風を意味する。しかし、狭くは第2次世界大戦前に西田の学説を羅いて同学生に在職し、戦争に対して積極的な空味づけを与えた西坂正蔵、高山^{こうやま}・こうやま 岩男、西谷啓治らを指して用いる。

西田が京都帝国大学哲学科の教授となつたのは、1913年（大正2）であるが、26年（大正15）の勲文「場所」を契機に、「絶対論」としてゆき「場所」の論理に基づく、いわゆる「西田哲学」と称する独創的な思想が開始された。また1919年（大正8）、西田によって京都帝国大学に招かれた田辺元は、「西田の『絶対論』の哲学に詰まながらも、その理想的な性格を克服しようとして、純粋の哲学体系の確立に向った。また昭和初期に京都帝国大学の教授を務めた和辻哲郎¹、九鬼鶴造²らも、西田の『絶対論』の哲学から大きな影響を受けた。こうして、西田、田辺らを中心には、京都帝国大学脇谷泰には、「京都学派」とよばれる独自の学風が生まれ、多くの優秀な学徒が集まることとなつた。

しかし京都学派が社会の大きさを注目を集めるようになったのは、西田の直接の
であり、京都帝国大学哲学科に在籍していた若き時代の高坂正顕、高山草野、西谷詮治らが、
第2次世界大戦の慘状について、積極的に発言するようになってからである。特に、彼ら
が生物学的節度を交えて、太平洋戦争勃発の前後に行ない、「中央公論」に発表した一連の短編、「世界史的正局と日本」(昭和2年1月号)、「東亜共済圏の倫理性と歴史性」
(昭和2年4月号)、「智力戦の哲学」(昭和3年1月号)
は、京都学派の名を世間に広めることとなつた(これらは1943年3月に「世界史の立場と日本」として出版)。

彼ら京都学派の若い世代は、西田の「純粹無」の哲学を、社会的歴史的世界の構造の崩壊に応用し、戦争を哲學的に合理化する「世界史の哲学」を開発した。彼らは、近代の世界観を、ヨーロッパの世界支配の過程と考える。しかし、ヨーロッパは世界を植民地化することによって、逆に植民地への依存を深め、現在ではその反対によって分解の危機に直面

しているという。そうした中で、第2次世界大戦。特に「大東亜戦争」は、英米の帝国主義的侵略に対する闘争という歴史的使命をもつものであり、今やアジアの諸民族は、「大東亜共闘団」という1つの特殊的同盟を形成して、その歴史的使命を遂行しなければならないというのである。こうして彼らは「歴史の流れの中で、太平洋戦争」の味を認めたのである。

なお、彼らと同世代で、同じく西田の教を受けた哲学者に、三木博¹⁰や芦原晴¹¹がある。三木は西田哲學から終生大きな影響を受けながらも、マルクス主義への接近を、茨城流に京都学派の主張から離れた。芦原晴はマルクス主義の立場から、逆に京都学派の實質を既開した。

◎荒川経彌「昭和思想史」朝日選書、1980
◎廣松涉「近代の超克」論 講談社学術文庫

史料 7

高坂正顕「日本の真理の現歌隠」

そういう軍国日本をほめたたえ、大東亜共榮圏の建設を理論づけたのが京都学派と呼ばれた、殊に京都大学の田辺元をはじめとする哲学者たちです。それから詩人や文學者、高村光太郎や角蔵茂吉などもいます。そう、うん、うん。

ただ私は今考えるに、戦争責任だけじゃなくて、なぜそういう分裂がおこったか、軍国日本に対する態度がどうして迷ったものになつていつたのか、なぜ今日までそれが続いていいのかということを理解することが、大事だと思います。そのためには、いきなり戦争責任の問題にいくよりも、まあいつてもいいけれども、それだけじゃなくて、何がおこったのかを十分に理解する必要があるでしょう。戦争責任問題というのは外にあらわれた行為についての話ですね。ある人が詩を書いて、それを家で読んだるだけじゃなくて、雑誌や新聞に発表すれば社会的行為になる。そういう外にあらわれた行為と、個人の心の内部の問題と、そのふたつの問題について、殊にその関係について考える必要があると思います。外にあらわれた部分だけをみていると、少し大ざっぱなことになりかねません。そこから推察して、心の中でどういうことを考えていたのかということをみなければなりません。

のことを語るのをやめたのである。

卷一

されば、「生徒の保護を為すことを許す」というべき筋書きだった。会合で語られたとされる「東条内閣打倒」というようなテーマにして、今田でいう内閣打倒とはまったく連絡を失している。それは西田のある意見収集人の回顧を借りるなら、「この時、東条打倒をいつては、彼の虎を踏むひなを虎視すあり、眞理の始祖に在るといふことより、大して自分を生命の安全保護とはならないのである」という行動であり、虎の虎を踏むよな無禮を示していた。

陸軍とすびついた組右ナショナリズムの思想流派グリーブは、東部軍隊の組合議会がはじめた数年まえから、東洋学派の「世界史の科学」を國体の無形とみなして重んじて攻め立てる。西田由加路や西原千賀、吉良徳といった學者「厚岸四士」グループが、陸軍や貴族院の一部ともすり合って想当然説を推進していた。西田義満はすでに明治十三年から、これら兩方の攻撃の口実をつぶらなくして、ついに朝鮮をたたかうと書簡を送っていた。しかし、その西田自身も「危機」をよろしくする點を認めていた。

もし大島彌太が伝えるような上記の会話が、陸軍政権に知れていたら、事はおだやかには済まなかつたはずだ。非業の謀死を受けた三木清や、後嗣の運命は、実は東洋学派の巨擘者達の身上にまで辿りついた。

甲 腸

11

して、彼の心を燃やさせなかつた。しかし、これはやはり間違なかつた。中央公論に説かれるために、中央公論にのせようとした佐藤敬「日露戦争の立場と日本」が行なわれたわずか十三日後に、表揚勲章で日露戦争の大ブタをさひた。それ以後、昭和十九年の秋まで、今までのノモハはいかにして陸軍をも理想的にならしくさせながら、戦勝を一日も早く有利に結局化せんとすることができなかつた。基本のチャードである。そしてそのためには何とか米系内閣を倒してもう一度、院内閣を実現させめる必要がある。どうやら、その方法がいろいろ議論せられるに至った。昭和十九年の新井から大鷹組「十年の政財界闘争」のノモハは、またその内容が少しあつて、面白い。すなはち、西園からあだなれあひそかの作風により、もはや敗戦は既定にして事のよしで、或成後悔の問題が筆論の中心になつた。

卷之三

(前略) このような個人主義の自由主義的な資本主義経済組織はやがて民族国家と結びつくときが来た。近代の民族国家が勃興の機運に際会したとき、國家の政治的意志が手段として資本主義を採用し、そして国力の発展をいやが上にも計つたのである。これらの国家の発展と侵略の意図の袖には対見されて未だ処置しづくされてゐる大陸の土地があつた。武力を背後にかくし、表面どこ迄も平和な通商の開拓を以て進む帝国主義的侵略はここに成立するのである。その結果アフリカ大陸もアメリカ大陸も専知の如き状態になり、東洋の状勢も兩様であつて印度も支那の魔方も知らるる如き状態である。

これは併し何を意味するか。歐米人達の生活の幸福のために東洋の君民族が掠取の慾望に任せられ東洋の人々の独自の生活が甚だしく圧迫の下にその發展を阻げられる事に他ならない。かくの如きは明白なる不正である。如何なる理論を以しても正当にこのやうな帝国主義的侵略の意図を正確化する道はあるべき筈がないのである。

日本自身に關して云へばベルサイユ条約以後この圧迫力は漸次に著しくなり、この情勢のままに拘泥すればやはがては日本自身の存続を危ぐするといふやうな状態になつて來た。事變の初発はかくの如き逼迫的な東洋の情勢の底を結つて始點衝動的な力を以て起つたのである。當時何人もこの事變がその萬相に於て何を意味するかを知つた者はゐなかつた。慄然と奮動との底には併し深い世界史的な理性があつた一職を通じてそれが發展につづけた戦争の眞の目的が眞に自覚されて來た。東亜共同体の理念がかかる自觉の一つの大さな段階であった。日滿三國の提携に依る反對勢力の驅逐に依つて初めてそれぞれの国は自國を立て抜いて行くことができる。日本の立場は帝国主義的侵略とは凡そ反対に立つて國防戦である。

然るに東亜共同体の理念の下に結束せんとする運動は、A B C D の日本解体論としていよいよ強い敵研究に阻まれなければならなかつた。大東亜建設戦の理念はこのやうな圧迫に直面して生み出された今次の事變の最高の自覺なのである。帝国主義的侵略を大東亜全域から驅逐し、これに依つて大東亜そのものの本來の生命をその本來の面目のままにそこに發展せしめること、それがこの戦争の意義であり、そしてそこにはこの戦争の歴史的な倫理性が成立する。何故なら戦争は国家利己主義的な帝国主義的侵略の意圖を認めるものでなくして、却てこのやうな不正を正すことによって世界の正義を明かにするところにその目的をもち、(こゝに旧秩序に対する新秩序の建設が直ちに倫理性の要求として成立するものにほかならないからである。大東亜共榮園建設は本来世界史的倫理性の建設感に他ならないのである。) 聖観の意義はそこに成立するのではなければならない。

